去りゆく技 32

残したいもの応援団

イグサ刈り

蘭を作ること、刈ることを「いきる」と言った。命よりもイグサが大事という時代があった。

イグサは青いダイヤと呼ばれた

イグサは稲と同じく水田に栽培する。冬12月に植えた苗は春から初夏に育ち、梅雨明けの炎天下を待って刈り取りが始まる。

7月中旬。土佐市の生産農家野村和仁さん(46才)のイグサ田では、早朝から田を駆ける。20年ほど前までは手刈りで行なわれていて、その光景は土佐の夏の風物詩でもあった。「イグサは田植機に刈取り機、乾燥機と新しい機械が出る度に値段が安くなってゆき、その都度、生産農家はどんどん減っていった」と野村さんは言う。

かつて土佐市は県内屈指のイグサの産地で、昭和27～28年頃には500軒ほあったという生産農家も、現在は野村さんを含めて5軒。高知県全体でもわずか8軒を数えるのみとなっている。

刈取り機が

イグサ栽培が隆盛期を迎えたのは戦後のことで、バラックから復興し、建築ラッシュに沸いた頃は畳表が足りなくなって値段が高騰し、イグサは『青いダイヤ』と騒がれたことがあった。

「昔はお金にもなったし、命よりもイグサが大事という時代があった。イを作ること、刈ることを『いきる』と言いました。生きるか死ぬかというぐらい、イグサにかける執念があった。とにかく、なぜイグサ栽培が良かったかというとカマー丁とイグサの苗があればすぐ作れたし、当時は他に換金作物がなかったですきねえ」と、野村さんの父・和喜さん(77才)。昭和27年、川村高知県知事の発案で内地留学生として福岡県イ業指導所に研修に出かけている。当時、土佐市の転作率は73～74%と全国一。まさに地域一丸となってイグサに人生をかけた時代があった。

地すりいっぱいに刈れ

イグサは直径2～3ミリ。高さ50～160センチの茎が150本ほど集まり、ひとくらの株になっている。その株と株との間隔は地域によってピッチが違い、高知の場合は21センチで、九州では18センチとなる。「イグサは暗闇で成長する。

野村さんの田では1反植えている。昔は1株カマで地面すれすれにハードな作業だった。

あまり幅を開け過ぎて光がようけ入りると成長が止まるがよ。高知の気候だと育ち過ぎて株が張り、逆に光が入らずにシロネになる。それを防止するために高知は21センチ間隔で植える」

その1株1株を刈るカマにも、農家の工夫があった。イグサ専用のカマがあり、刃渡りは13センチとやや短め。1株を2回で刈りさばくのが基本だ。

「1センチでも株元低く『地すりいっぱいに刈れ』と教えられた。イグサは日方での販売で、先よりも根元のほうが収量があるので、その収量を増やすために地面すれすれに刈らにゃいかん。

小ぶりなカマのほうが労力的にもラクで、きれいに刈れます」

刈り取ったイグサはヒモで束ね、勢いよく振って、寸の短いイグサを選り落とす。

この作業を『すぐり』という。

すぐったイグサは、そのままだと褐色を帯びて品質が落ちるので必ず『泥染め』にする。畳表独特の色と香りと光沢を持たせるためでもあり、その泥や色粉の配合によって乾燥した時の出来上がりが若干違ってくる。それが買い手の評価となるわけで、泥の配合は各農家の秘伝でもあった。

「昔は田んぼの中に穴を掘って、そこに泥を入れて、手刈りする一方で染めよったね」

泥染めも、今は機械が束ごと迅速に上手に染める。泥の配合は農家の秘伝。野村家では淡路島の三原染土と長崎産の白い泥をブレンドしている。割合は内緒。

手には1日5食出された。

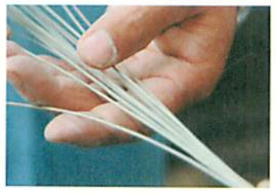
「暑さと疲れに負けず、飯を食える人がイグサ刈りには向いちょった。その反面、繊細さも大事で指先が器用で気のつく人が重宝がられた」と野村さん。

しかし、隆盛を極めた高知のイグサは一体なぜ、ここまで衰退の一途を辿るに至ったのだろうか。

「高知のイグサは粘りと強さがあって全国的にも評価が高かったけんど、農家が"目先商い"をしてしまったがために、のれん相場のあるところに出荷して、備後畳のように高知県独自のブランドにようせんかった。それで価格がだんだん落とされたわけよ」

それに生産者の高齢化と後継者不足、

刈ったイグサを束ねて「すぐり」作業。へその高さあたりでイグサを縛り、豪快に振って丈の短いイグサを落としていく。「短いイグサは畳にならんきね」。機械化とともに、この作業も見られなくなった。



泥染めをし、乾燥させたイグサはまさに畳の色だ。「もとのイグサの緑色を生かした、光沢のある畳づくりをめざしている」と言う。

田んぼで作る技術が良くないと、いい畳はこしらえれん

そのイグサの最盛期ともなれば、農家だけでは人手が足りず、方々からアルバイトを集め雇った。40代以上の男性の中には、イグサ刈りのアルバイト経験を持つ人も多いのではないだろうか。体力的にはきつかったが、賃も待遇の良さも破格だった。夜明けとともに田に出て日がなイグサを刈り、働き

それを仁淀川の河原に運び、天日で2日ほど干して乾燥させていた。今は機械乾燥で60度、16時間ほどで仕上がる。以前はイグサ田1枚刈るにも10人、干すにも10～15人の人手を要したものだった。

和室の減少という生活スタイルの変化が追い討ちをかけた。昭和60年まではほぼ国産で賄われていた畳表も、今や中国産など輸入の方が多くなっている。

「今は畳の需要も二極化していて、国産の高級な畳がほしいという消費者もおる。そのためには田んぼで作る技術が良くないと、いい畳はこしらえれん。私ら農家も原草生産から畳表の製織、販売、流通までを手掛ける個性的な生産者を目指さんとやっていけんし、そこに生き残りをかけちゅうわけです」

土佐の田んぼから生まれるは同じ。畳も地産地消とはいかぬものか。

イグサ生産農家
野村和仁さん(のむらかずひと)
土佐市

イグサは粘土質で表土が深い田が良く、粘りのあるイグサが採れる。80～160センチが栽培の目安だ。かつて高知のイグサは評価も高かったが、現在は生産量が激減し、熊本、佐賀、福岡、岡山、広島、石川などに次いで高知の順。